

支援対象児への体育実践・4年生のタグラグビー実践から学ぶ

編集部 田中宏樹（兵庫教育大大学院）

1. アフォーダンスとは

今回の研究部例会のキーワードは「アフォーダンス」でした。アフォーダンスとは、環境が動物に対して与える「意味」のことです。授業づくりに関して言うと、場づくりや口伴奏や教師の発言などが子どもに対するアフォーダンスとなります。

まず初めに、安武先生が「体育実践にアフォーダンス論を生かすには」というテーマでお話しされました。アフォーダンスは、「運動学」と親和性が高く、その視点から実践を考えることの重要性を感じました。「どうすれば子どもが分かるのか？」の方法論として必要な視点だが、それが一人歩きしてはいけないという意見もありました。

典型的な自閉症の特性が見られる子どもです。また、自傷行為も頻繁にあり、自分の心や体をコントロールする力をつけることが大きな目標の一つです。

体育の授業では、低学年から参加することが難しく、身につけるべき身体動作や感覚が育成されていないと言えます。笹田先生は5年生の時からS君を支援学級で担当しており、体育の授業も付きっきりで一緒にいても、まともに参加できたことがなかったようです。

しかし、S君は昨年11月に行われた跳箱運動で初めて自分から取り組みました。高い段の跳び箱から、政府ティーマットに飛び降りる動きが気に入り、楽しそうに活動に取り組んでいました。笹田先生はこの経験を基に、今年度、S君とマンツーマンで取り組む特別支援学級の時間の中で、実践に取り組みされました。



【実践の一部の紹介】

- ・セーフティーマットを支援学級に持ち込む。跳び箱の上からS君は飛び込んだが、2回目以降、勢いよく飛び込まなくなる。
- ・セーフティーマットの奥にパーテーションが置いてあったため、それが原因なのではないかと考える。マットを斜めに配置し、お気に入りのぬいぐるみを目標物にすることで飛び込むようになった。

2. 支援対象児の跳び箱実践

次に、笹田先生が「支援対象児への跳び箱を中心とした実践報告」をされました。笹田先生は今年度、特別支援学級の担任をされており、その児童の中の小6男児S君（知的な遅れがある重度自閉症）との実践です。S君は局所的なこだわりや常同行動などもあり、

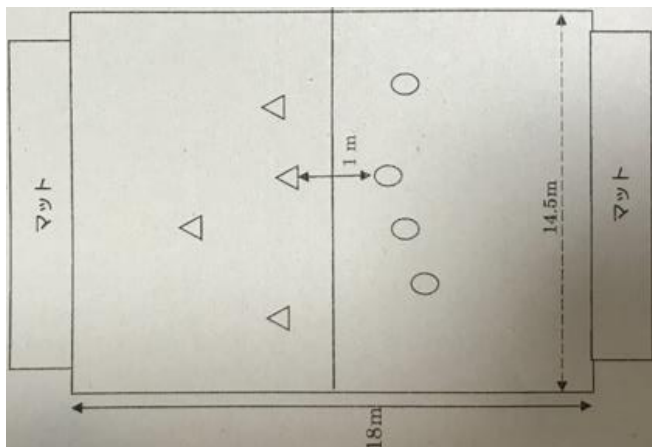
笹田先生はS君ができる動き、よくする動きを基に考えて、実践されました。また、こちらが意図していた動きにならない場合、その要因をアフォーダンスの視点から考えて、何度も修正されていました。S君の運動感覚

を養っていくためにも、必要な手立てであったと感じました。これからの課題として挙げたことは、その体育実践がいかにして「**社会性や文化性**」に繋がっていくかを考えていくことです。

3. タグラグビー実践

次に楠橋先生が「ボール運動におけるタグラグビーの意義は？」というテーマで小4児童10人に対して実践されました。

昔からタグラグビー実践をしたいという思いはあったようですが、先生自身フラフト実践に軸があり踏み切られていなかったそうです。それでも、W杯があったこのタイミングで実践されました。



*トライは走り抜けるのではなく、マットに滑りこむ。マットの幅がフィールドより狭いことで、外から回り込むように子どもがトライしていた。

タグラグビーを通して、何を教えるのか？皆さんはどのようにお考えでしょうか？ラグビーW杯日本代表によって「One team」というワードが有名になりました。道徳的意義を全面に押し出すのか？それでは、同志会が大事にしてきた哲学と違ってきます。「ゲームにみんなが参加して、みんなが楽しむこと」は勿論大切ですが、ゲームがレクリエーションで終わっては勿体無いです。

楠橋先生は「**タックルポイント**」をキーワードにされていました。ボールを持ってタグを取られないように走るのではなく、あえて相手にタグを取られに行く。日本代表の選手も、試合の中で何度も中央突破を試みていました。その突進には、相手を中央に引き付けて、その後にサイドにいる選手にパスをしてトライを狙う意図がありました。学習内容の中心は、タグを取られた後の速攻です。子ども達は、速いパスを繋いで、空いているスペースに攻め入っていました。

また、楠橋先生は授業の中で、子ども達が自分達でコツを見つけて、学び深めていくことを大切にされています。教え込むことはされません。このやり方は、時間と根気強さが問われますが、楠橋先生は、それを楽しんでおられるように感じます。ベテランと呼ばれるようになっても尽きない、楠橋先生の実践に対する熱意に、尊敬の念を抱きます。今回の実践は、参加者の先生方にとっても、良い実践をするための起爆剤になったことでしょう。

